日本手話学習者の言語接触場面におけるあいづち表現

中 野 聡 子・下 島 恭 子

群馬大学教育実践研究　別刷
第40号　203～210頁　2023

群馬大学共同教育学部　附属教育実践センター

群馬大学教育実践研究　第40号　203～210頁　2023

日本手話学習者の言語接触場面におけるあいづち表現

中　野　聡　子[1)]・下　島　恭　子[2)]

1）群馬大学共同教育学部特別支援教育講座
2）群馬大学大学教育学生支援機構学生支援センター

The Use of Back Channels by Learners of Japanese Sign Language in Contact Situations

Satoko NAKANO[1)], Kyoko SHIMOJIMA[2)]

1）Department of Special Needs Education, Cooperative Faculty of Education, Gunma University
2）Student Support Center, Organization for University Education and Student Services, Gunma University

キーワード：日本手話，第二言語習得，言語接触場面，あいづち
Keywords : Japanese Sign Language, second language acquisition, language contact situation, back channel

（2022年10月23日受理）

１．はじめに

近年の第二言語・外国語教育では，コミュニケーション能力の育成が重視されている。相互行為としての対話コミュニケーションは，「２人もしくはそれ以上の個人が相互に努力する」「話し手と聞き手が入れ替わりながら，相手の言うことに言語，または非言語で応答する」「聞き手は話し手の言葉の文字通りの意味ではなく，話し手が何を意図しているのかに対して応える」ことによって成り立つものである（Gumperz，1982）。会話において，聞き手はただ話し手の発話を「聞く」だけでなく，相手の発話を促したり，感情を表明したり，さらには確認や質問をするといったフィードバックを行うことが求められ，それらの行動が欠如していると，話し手に「話を聞いていない」「話題に興味がない」「不快に感じている」などの印象を与えかねない（半沢，2016）。聞き手としてのフィードバックの方法の１つにあいづちがある。あいづちは，「話し手が発話権を行使している間に，聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現」（堀口，1997）である。

あいづちの定義は研究者によって異なるものの，あいづち行動には言語・文化的な差異がみられる。日本語の会話において，あいづちは特徴的であり，英語や中国語に比べて高頻度で生起し（Maynard，1986；White, 1989；メイナード, 1993；Clancy et al.，1996），表現形式が多様である（大浜，2006）。このため, 第二言語としての日本語教育において, あいづちは重要な学習項目の１つとされてきた（水谷, 1984；水谷, 1988）。

手話言語の「聞き手」の役割や行動に関する研究は，日本手話も含めて未着手の状態にある。しかし，聞き手としてのフィードバックが乏しい場合，日本手話母語話者は会話の進めづらさや違和感を抱くことになり，学習の初期段階から，「聞いているということ」「わかったということ」を示すように指導をしなければならないことが多い。音声言語において，あいづちの多くは話し手がポーズを置いた文節の切れ目付近や話のリズムが止まるときに打たれることが多い

が（Maynard，1986），このことは手話言語も同様であると考えられる。ポーズやリズムに影響する話し手の韻律的なうなずきについて，田頭（2019）は，日本語，英語，日本手話，アメリカ手話における生起頻度を比較している。サンプル数は各言語について２名と少ないものの，興味深いのは，１分間あたりのうなずきの回数について，日本手話と日本語は14回～33回，アメリカ手話と英語は０回～５回となっており，モダリティの相違よりも文化の相違がうなずきの頻度に反映されていたことである。日本手話においてアメリカ手話よりも話し手の韻律的なうなずきの頻度が高いということは，日本手話の会話は手話言語のなかでも，話し手，聞き手ともにあいづちの頻度が高く，またあいづちが会話の円滑な進行の重要な要素となっている可能性がある。

そこで本研究では，あいづち表現を日本手話教育における重要な学習項目の１つであると仮定し，あいづち表現の指導への示唆を得ることを目的として，日本手話学習者の言語的なあいづちの使用を，生起頻度と使用されるあいづちの種類の側面から明らかにする。

２　方法

２．１　対象者

（１）ろうの当事者団体の職員を務める日本手話母語話者（S1）。

（２）厚生労働省手話通訳者養成カリキュラム基本課程に相当する授業を履修している，ろうの日本手話母語話者１名（S2）と，聞こえる日本手話学習者９名（J1～ J8）。日本手話学習者は全員，大学入学後に日本手話の授業において学習を開始し，累積学習時間は約150時間となっている。学習者らはS2と同期で，授業外においてもS2との接触機会があり，全体的な日本手話スキルは，学習時間数に比して高いと言える。

２．２　分析対象場面

授業における言語活動としてS1にインタビューを行う場面を分析対象とした。受講者は３名で１つのグループ（S2とJ1・J2，J3～ J5，J6～ J8）を組み，１グループにつき20分の持ち時間でS1にインタビューを行った。

２．３　手続き

インタビュー実施前に宿題と授業１回分をあてて準備を行った。教員から基本的なインタビューの心構えについて説明し，対象者らは，S1の生いたちや現在の仕事に関する情報収集を行う他，インタビュー全体の構成と質問内容について検討した。

インタビューは，参加者全員がWeb会議システムZoomのミーティングルームに入室して行った。Zoomのホスト教員がスポットライト機能を使って，インタビュイーのS1とインタビュアーのグループ構成員３名の合計４名がZoomのメイン画面に表示されるように設定したあと，インタビューが開始された。インタビュアーとインタビュイーのやりとりは手話のみで行われ，Zoomのチャット機能を使用することはなかった。またインタビュー中に教員が介入することはなかった。インタビューの様子はZoomの録画機能を使って記録された。

本研究の実施にあたり，研究の目的と内容，授業の成績評価には一切関係が無いこと，研究結果の公開は個人を特定しない形で行なうことを，Googleオンラインアンケートフォームにて提示し，参加者全員から研究協力の同意を得た。

２．４　分析の観点

聞き手の言語的なあいづちとして，堀口（1991）を参考に，以下の項目について分析を行うこととした。

あいづち詞
　―うなずき
　―うなずき以外（「ナルホド」「ヘェ」など）
繰り返し（相手の発話の一部を繰り返す）
完結（先取りなど話し手の発話を完結させる）
補強（話し手の発話内容を言い換える）

うなずきは，音声言語のあいづち研究では非言語的表現の範疇として取り扱われるが，日本手話においては日本語の「ハイ」「ウン」といったあいづち詞に相当する意味・機能を持つと考えられるため，言語的なあいづち表現として取り扱うこととする。

２．５　データの記述

手話の発話文は，手話の語順に沿って，類似した意味の日本語の単語を記述した。また，言語的なあいづちの詳細を把握するため，以下の記号を用いて手話の

【例１】
J4：／PT2　子ども　とき（S1：n）　性格　何？
S1：／((眉上げ))　((J4の模倣))　[((J4の模倣))　何？／　　[((気づく))／性格／
J4：　　[(n)／性格　例えば　(—)　[性格　(—)　(n)　(—)
／例えば　活動　活動((S1：あ～という表情))　落ち着く　いろいろ／また((首を傾げる))
((J3：首を傾げる))　好き　活動　例えば（J3：n）　スポーツ　好き（S1：n）　絵　絵
書く[好き／((首を傾げながら腕を組む))
S1：　　[((首を横に向けながら nnn))

（日本語訳）
J4：子どものときの性格はどうでしたか。
S1：(「性格」の手話の動きを模倣して）これは何？
J4：性格。例えば…。
S1：性格か。
J4：例えば，活動的とか，落ち着いていたとかいろいろ。または，好きな活動。例えば，スポーツが好きとか，絵を描くのが好きとか。

発話文に付記を行った。

／	文の開始位置と終了位置
？	疑問
→	発話が次行に続くことを表す
((文字))	注釈・説明
文字	相手に伝わっていないと思われる言葉
(—)	直前・直後の後や発話の中断
[	発話の重なりの開始位置
]	発話の重なりの終了位置
(n)	うなずき
(発話者：n)	相手の発話進行中に生じる短い頷き
(bf)	あいづち生起時の上半身前傾
(bb)	あいづち生起時の上半身後傾
《文字》	あいづちの手指／非手指表現が強い
〈文字〉	あいづちの手指／非手指表現が弱い

３　結果と考察

３．１　インタビューにおける全体的な傾向

インタビュアーを務める対象者らの日本手話スキルには個人差があり一概には言えないものの，どのグループも自己紹介や出身地を話題にしたアイスブレイクから入り，S1の手話に対する思いや，S1の職場であるろうの当事者団体が行っている事業の目的や詳細を尋ねるなど，かなりふみこんだ内容のやりとりを，適宜学習者同士で補い合いながら行うことができていた。

修復的調整を必要とする「通じにくさ」の多くは，インタビュアーからインタビュイーに向けられた質問において生じていた。母語話者からみて質問の意図がつかみにくい，すでに話した内容と同じようなことを聞かれる，初対面の相手との心理的距離を縮めていく順序として違和感を覚える質問内容であるなどの理由が考えられた。この場合，S1からの聞き返しによって対象者らが行う修復的調整は，要素を追加し詳しく述べる「拡張言い換え」（増田，2005）が多かった。例１では，S1から／性格／のことで質問の意図を尋ねられて，J4が具体的に言い換えている。

また，S1のほうでも，さまざまな修復的調整が行われており，相互作用のなかで深いやりとりが成立可能になっていたと思われる。

３．２　あいづちの生起頻度

インタビュアーからの質問とインタビュイーによる応答を会話の１つの単位とし，参加者全員について，質問―応答の当事者である場合と，非当事者である場合に分けて，１分間あたりのあいづちの平均回数を算

表１　１分間あたりのあいづちの平均回数

対象者	質問―応答の当事者	質問―応答の非当事者
S1	15.49	―
S2	10.80	10.56
J1	3.68	0.54
J2	11.08	1.39
J3	15.88	12.76
J4	12.06	4.89
J5	13.51	5.01
J6	9.17	2.00
J7	20.06	21.31
J8	10.77	3.77

出した（表１）。

母語話者のS1とS2を基準にすると，日本手話において，話し手と聞き手の間で円滑なコミュニケーションが促進されやすいあいづちの生起頻度は，概ね10～15回／分であると考えられる。日本語の会話におけるあいづちの頻度は，個人差，相手との関係，場面により異なるものの，概ね15～20回／分とされている（水谷，1983）。本研究では言語的なあいづちのみ分析の対象としているが，非言語的なあいづちを含めれば，日本手話の会話も日本語のそれと同じく，あいづちの生起頻度が高い言語と言えるかもしれない。

しかし，J7はあいづちの生起頻度が特に高いだけでなく，例２にみられるように，あいづちと身体の前傾が共起することも多かった。また母語話者に比べて，あいづちを表出する動作が大きかった。手話言語のアーティキュレーションは，話し手の上半身の前方に広がる手話空間（signing space）で行われる。韻律的側面からみると，手や腕の動きの大きさや身体の前傾は，音声言語で言えば「声が大きい」ことを表す。従って，J7のあいづちは，話し手の発話への妨害となっていた可能性がある。

J1～ J8について，質問―応答の当事者である場合は，J1の3.68回/分を除いて適度なあいづちを打つことができていると考えられる。しかし，質問―応答の非当事者，すなわちグループ内の他の構成員がS1に質問を行って回答を受けているときのあいづち生起頻度をみると，当事者である場合とほぼ同じ頻度と言えるのは，S2，J3，J7の３名のみであり，他の学習者は大幅に減少していた。あいづちを打つには，話し手の発話内容をある程度理解できていなければならない。これらの結果から，まず会話の当事者としてあいづちを打てるようになり，次に会話の非当事者であっても同じ談話空間の参加者としてあいづちを打てるようになるという２つの発達段階があること，また，これらの段階に着目することで，あいづちに関する学習者の日本手話コミュニケーション能力の発達状況を評価することができると考えられる。

３．３　あいづち表現のバリエーション

インタビューの参加者全員について，「あいづち詞」

【例２】

S1：／是非＊＊（(地名)）（J7：ｎ）　日本（J7：ｎ）　合う　場所（J7：ｎ）／群馬　言う
　　みなかみ（J7：bf）　［似る（J8：ｎ）　思う／　［田舎　合う　場所→
J7：　（ｎ）［／（bf）《みなかみ》（nn）［（bb）／へぇ　へぇ／
S1：→［良い／　［（J6・J8：ｎ）
J7：　［／《田舎》 田舎 へぇ／　［田舎　（bb）へぇ　へぇ／
S1：（ｎ）
J7：（ｎ）／なるほど／

（日本語訳）
S1：是非。＊＊は日本らしいところで，群馬県でいえば，みなかみに似ていると思います。
J7：水上。
S1：田舎の雰囲気がよいところです。
J7：へぇ，田舎なんですね。
S1：はい。
J7：なるほど。

【例３】
S1：／昔　時　歳　18　酒　飲む　できた　昔（S2：((目の見開き・頭部大きく)) nn）／
　今　禁止（S2：((笑いながら)) nn）禁止　［でも　　］昭和　50　年代→
S2：　　［へぇ（((笑い)) ］
S1：→時　飲酒　できた　PT-３／

（日本語訳）
S1：昔は18歳から飲酒ができました。今は禁止ですけども。
S2：へぇ。
S1：昭和50年代までは飲酒ができたのです。

【例４】
J5：((手を合わせる)) ／口話　口話　手話　替わる　替わる　きっかけ　何？／
S1：((眉上げ)) (bf) ／口話［手話　替わる　　［きっかけ　前　言う　同じ　→
J5：　　［／口話　手話　替わる　［替わる　きっかけ／
S1：→アメリカ（J3・J5：n）　行く（J3：n）　ろう　アイデンティティ　へぇ（J3・J5：n）
　本当　手話　必要　覚醒　から（J3・J5：n）　手話　切り替え（J3・J5：n）　意味（J3・J4・J5：n）／OK／

（日本語訳）
J5：口話から手話に替わったきっかけは何でしょうか。
S1：え？ 口話から手話に替わったきっかけというのは，先ほども言ったように
J5：口話から手話に替わったきっかけです。
S1：アメリカに行って，ろう者としてのアイデンティティというものがあることを知り，手話が本当に必要だと気づいて，手話へ切り替えたわけです。

表２　あいづち表現の種類別にみた生起回数

対象者	あいづち詞		繰り返し	完結	補強
	うなずき	その他			
S1	280	22	4	15	3
S2	144	19	4		1
J1	23				
J2	61	2			
J3	223	2	1		3
J4	97		1		
J5	96				
J6	54	1	1		
J7	226	31	29	5	4
J8	88				

「繰り返し」「完結」「補強」の生起回数を表２に示した。

最も多く使用されているのは，うなずきによるあいづち詞であった。うなずきには，例３にみられるように驚きの表情を伴った大きなうなずきや，笑いを伴った小刻みの連続したうなずきなど，さまざまなものがあった。

しかし，学習者に最も多かったのは，S1の発話の文節の切れ目や文末で，軽く１度か２度うなずくものであった。このようなタイプのうなずきは，相手の発話内容を理解しているとは言い難い場合にもみられた。例４は，S1が小さいときから口話で育ち，ろう学校高等部時代は社会に出たあとのことを考えて日本語対応手話を使っていたこと，しかし大学入学後，アメリカでの研修旅行を経験して，ろう者にとっての手話言語の大切さや，ろうとしてのアイデンティティへの目覚めがあって日本手話の使用へ切り替わっていったというエピソードを語ったあとの会話である。S1の前述内容の発話中，J5には18回のうなずきがみられたが，S1が語ったはずのことを再び質問し，S1は，「さっきも言いましたが」と若干とまどいながら応答している。

うなずき以外のあいづち詞で多く用いられていたのは，新しく知ったことに対する新鮮さや驚きを表す／

へぇ／，驚きを含みつつ同意して受け入れる／なるほど／，相手の意見と同感であることを表す／同じ／や／本当／の４つであった（図１参照）。

図１　うなずき以外にみられたあいづち詞

学習者のうち，うなずき以外のさまざまなあいづち詞を使用できていたのは，J7のみであった。J2とJ3は２回，J6は１回の使用がみられたが，いずれも短い会話の文末などで用いられており，S1の発話が長く続いているときのあいづちはうなずきがほとんどであった。このことは，J7がS1の発話の長さに関係なく，さまざまなタイプのあいづち表現を用いていたことと対照的であった。

このことから，あいづち詞の使用はまず，「『聞いて』いる」「理解している」という信号を伝える機能を持つうなずきから始まり，次に驚き，面白さ，納得のような気持ちの伝達も含むうなずきに発展し，さらに手指表現を用いたあいづち詞によっても，そのような感情や共感を伝えることができるようになるという発達段階があると考えられる。

学習者において，繰り返しはS7に顕著にみられた。この繰り返しは，例５の／５年前／や／４年前／にみられるように，理解していることの信号や自身の気持ちを示すといったあいづちとしての機能を持つ場合もいくつかあったが，例６の／社会福祉法人／にみられるように，使い慣れていない単語を自身で確認するかのような繰り返しが目立っていた。

完結や補強のあいづちは，S2，J1～J8ともに，ほとんどみられなかった。これが日本手話の会話特有のものなのかどうかは明らかでないものの，今回の研究では場面設定がインタビューであり，質問―応答の形でやりとりが進むことから，先取りを含む完結や言い換えのような補強のあいづちがそもそも生じにくかった可能性がある。なお，S1にみられた完結や補強のあいづちは，インタビュアーの学習者が言わんとしていることを先取りして会話が円滑に進むように手を差しのべるものが多かった。

また，学習者はうなずきのタイミングがずれたり，

【例５】

S1：((首を振りながら考える))／本当（J7：ｎ）＊＊市（J7：ｎ）　PT-３　＊＊（(県名))
　　中（J7：ｎ）　最初　手話言語条例　成功 場所（J7：ｎ）／
　　PT-３　今　５年　［前　思う（J6・J8：ｎ）／５年　［前／→
J7：　　［５年　５年前（nn）　　［なるほど
S1：→／＊＊県　成功　４年前　［成立　（ｎ）／
J7：　　［((あ，という表情))　４年前　なるほど

（日本語訳）

S1：実は，＊＊県の中では＊＊市が一番始めに手話言語条例が制定された市なのです。今から５年前だったと思います。
J7：５年前だったのですね，なるほど。
S1：＊＊県の手話言語条例は４年前に制定されました。
J4：４年前でしたか，なるほど。

【例６】
S1：／＊＊（(県名)）　社会福祉法人　設立　［前　５年　社会福祉法人（J7:nn）→
J7：　［社会福祉法人
S1：→設立　／５年（J7・J8：ｎ）　あと　５年（J7：ｎ）　近づく（J7・J8：ｎ）　とき
　＊＊（(県名)）　呼ばれる（J7：ｎ）（ｎ）決める（J7：ｎ）　＊＊（(県名)）移る／

（日本語訳）
S1：＊＊県に移って５年後に社会福祉法人を立ち上げ，
J7：社会福祉法人
S1：それから５年が経つころに，＊＊県から声をかけられて移ることにしました。

【例７】
S1：／聴者　ろう者　関係ない　聴者（J2：ｎ）　気遣う（S2：nn）　不要（S2・J2：nn）
　／当たり前／対等（J2：nn）　生活　私達（J2：ｎ）　求める　意味／　PT-３
　［みんな　留意　助ける　希望　思う（S2・J2：nn）／よろしく　［お願い／
J2：［（ｎ）同じ　［（ｎ）同じ

（日本語訳）
S1：聴者もろう者も関係なく，聴者の気遣いは不要なのです。当たり前です。対等な生活を私達は求めているわけです。
J2：そうですね。
S1：なので，みなさんは是非そのことを覚えてご協力いただきたいと思います。よろしくお願いします。
J2：そうですね。

不適切なあいづちの使用がみられることがあった。例７では，J2が，まだ話の展開が見えず，S2はあいづちを打たない／聴者／，／私達／の位置でうなずきを入れたり，S1の「よろしくお願いします」に対するあいづちとして「ソウ」を意味する／同じ／を使用している。文脈的には，承知したことを意味する／わかる／のあいづちが適切である。

４　結論

日本手話の会話においても，あいづちは，「聞いている」「理解している」という信号だけでなく，同意や共感，感情といった自己の態度を伝える機能を有し，円滑なコミュニケーションに重要な役割を果たしていると考えられる。

言語接触場面の会話において，学習者のうなずきによるあいづちの使用は，まず発話が自身に向けられたとき，次に他者に向けられたときへと２つの発達段階がみられる。また，うなずきは，初期段階では「聞いている」「理解している」という信号として機能しているだけであるが，その後自己の態度を伝える機能が追加されるようになる。さらに，うなずきだけでなく，手指表現によるあいづち詞や繰り返しなど，自己の態度の伝達のバリエーションが広がっていく，という順序がみられた。

このようなあいづち表現の豊富さは，相手の発話内容に対する理解の深さと密接に関連していると考えられる。日本手話のあいづち表現について学習者に提示することは必要ではあるものの，あいづちの適切な使用は，あくまでも発話内容の理解が前提となっていることに留意すべきであろう。母語話者同士の手話会話の映像を再生速度を落として観察させる，母語話者との接触機会を増やすといった指導が必要であると考えられる。

本論文の役割分担について

連名著者の下島恭子は「３．１．インタビューにおける全体的な傾向」，筆頭著者の中野聡子はこれ以外のすべての部分を担当した。

謝辞

本研究は，日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（B）（一般）19H01702），日本財団助成事業「聴覚障害に関わる支援人材育成を目的とした遠隔手話教育システムの構築」の助成を受けた。

参考文献

Clancy, P. M., Thompson, S. A., Suzuki, R., & Tao, H. (1996). The conversational use of reactive tokens in English, Japanese, and Mandarin. *Journal of Pragmatics*, 26, 355-387.

Gumperz, J. J. (1982). *Discourse strategies*. Cambridge University Press.

半沢千恵美（2016）．日本語学習者の聞き手としての行動を評価する―相づちと頷きの不自然さに着目して―．*Journal CAJLE*，17，23-43.

堀口純子（1991）．あいづち研究の現段階と課題．日本語学，10(10)，31-41.

堀口純子（1997）．『日本語教育と会話分析』くろしお出版.

増田展子（2005）．接触経験によって日本語母語話者の修復的調整に生じる変化―共生言語学習の視点から―．筑波大学地域研究，25，1-17.

Maynard, S. K. (1986). On back-channel behavior in Japanese and English casual conversation. *Linguistics*, 24, 1079-1108.

メイナード・K・泉子（1993）．『会話分析』くろしお出版

水谷信子（1983）．『あいづちと応答』水谷修編『講座 日本語と表現３ 話しことばの表現』37-44，筑摩書房.

水谷信子（1984）．日本語教育と話しことばの実態―あいづちの分析―．『金田一春彦博士古稀記念論文集第２巻言語学編』261-279，三省堂.

水谷信子（1988）．あいづち論．日本語学，7(13)，4-11.

大浜るい子（2006）．『日本語会話におけるターン交替と相づちに関する研究』渓水社.

田頭未希（2019）．頷きの頻度と生起位置：音声言語と手話言語の比較．人工知能学会研究会資料，第86回言語・音声理解と対話処理研究会.

White, S. (1989). Back channels across culture: A study of Americans and Japanese. *Language Sociology*. 18. 59-76.

（なかの　さとこ・しもじま　きょうこ）